四、滑稽俳句の実際（その三）

河村正浩

台風の目のまん中で釘を打つ

この句は川柳大会で大賞を取り、後に全く同じ句が（作者は異なる）俳句大会で上位入賞となった。その時、川柳側からは、盗作の非難ではなく「俳句の選者がこの句を俳句として選んだことが理解できない。これは俳句ではなく川柳である」というコメントが出たのは意外であった。

この例を見ても分かるように、俳句と川柳の境界は極めて難しいが、こうした例は案外多い。これは短詩型の宿命であり、結論的には俳句とするのか川柳とするのかはどちらでも良いのである。

ただ、この句には余りにも類似句が多い。

台風の目のまん中で釘を打つ

台風の目の中にゐて釘を打つ

「台風の目のまん中で」もしくは「台風の目の中にゐて」の何れかの下五が、「飯を炊く」「飯食べる」「酌み交わす」「歯を磨く」「大の字に」「大鼾」「雑魚寝かな」「鼻をかむ」「写経する」といった具合である。

「滑稽」を念頭に私の俳句観を述べる。

・俳句（滑稽）は押しつけるものではない。滑稽を意識して詠んだものは低俗になりやすい。

・物を離れた俳句は弱い。頭で考えない。直接対象（物）を見て詠むことを心掛けたい。思いを直接述べると言いたいことを言ってしまい、鑑賞の余地がないばかりか季語が動く。物を通して発見や出会いの驚きを詠むことである。

・面白いことを意識して言わない。結果として読み手が面白いと思うのが俳句である。気持ちを入れ込んでもいけない。作者が昂ぶれば昂ぶるほど読み手の心は冷めて行く。作者は一歩退いて冷静にさり気なく詠む。又、数日置いて冷めた目

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

で眺め推敲する。

・より良い俳句を詠むには、より良く生きることである。良い俳句とは、作者の生きている実感、命の尊さ、運命の不思議など、それぞれの人生の感じられる俳句である。

・滑稽俳句といえど余韻余情が大切。芭蕉も「言ひおほせて何かある」と言っている。

以上は、私自身への自戒の言葉でもある。

最期に、小誌『山彦』より滑稽と思われる句を挙げさせて頂き、私の滑稽俳句論壇の筆をおかせていただく。

初夢の句会に芭蕉一茶子規	相本正美
賀状には酒止められぬあいたいな	竹下やすお
いまだ謎の多い妻のしゃぼん玉	三牧義明
朝寝して天女の誘い拒めない	佃　俊之
うまいもの食うて勤労感謝の日	吉浦百合子
サングラスかけ退屈な鼻がある	藤井康文
もの忘れ笑い飛ばして柿かじる	実松瑞栄
喪の酒にしつかり酔うて春時雨	河村正浩
人既に嗅ぎしあとなり百合の花	同

（完）

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。